

現代日本人と“家の宗教” — JGSS-2000/2001 からのデータを中心として —

木 村 雅 文
(大阪商業大学総合経営学部)

The Contemporary Japanese and “Family Religion”
From the Data of JGSS-2000/2001 and Other Social Surveys
Masafumi KIMURA

The aim of this monograph is some considerations on the contemporary Japanese religious consciousness in terms of "family religion" by the use of some datas from JGSS-2000/2001 and other social surveys. We confirm four characteristic features about this problem. (1) A littlemany contemporary Japanese chooses "Although not practiced,I have a family religion" in self-administered questionnaire of JGSS-2000/2001. (2)We find some new explanations for all sorts of category with reference to this theme,making use of "family religion". (3)In present-day Japan, the majority of reigious believer and possessor of "family religion" is a Buddhist to be reflected traditional Japanese religious culture since Tokugawa(Edo) period. (4)The religion with subjects'spouses in our project do not make little difference from his or her partner's one.It seems to us that this phenomena is also functioned by "family religion".

Key words : JGSS-2000/2001, contemporary Japanese, "family religion"

本稿の目的は、JGSS-2000/2001 から得られたデータを中心にし、その他の社会調査の結果も参照しながら現代日本人の宗教意識を、とくに“家の宗教”という観点から考察するところにある。ここでは、以下のような特徴のあることが確認された。(1)JGSS-2000/2001 において現代日本人は、「特に信仰していないが家の宗教はある」という選択肢を選ぶ人がやや多い。(2)この“家の宗教”を参照することで、現代日本人の宗教意識の説明に当たってさまざまなカテゴリーの分析における新しい解釈が可能になる。(3)現代日本においても“家の宗教”という江戸時代以来の伝統的な宗教文化が反映しているために宗教名としては仏教が多く挙げられている。(4)調査対象者のうちで配偶者のある者に対しては、配偶者の宗教を尋ねたが、本人の場合と大差のないものが得られた。これも“家の宗教”が機能しているからだと思われる。

キーワード : JGSS-2000/2001 、現代日本人、“家の宗教”

1. はじめに

本稿は、現代日本人の宗教意識の特徴を“家の宗教”という観点から考察することを目的としている。しかし、この日本人の宗教意識というテーマについては、宗教学や宗教社会学などの学問分野において非常に多くの研究や論評がなされており、これらのすべてを参照することはとてもできないように思われる。

そこで、本稿では、この研究論文集が調査結果として用いている JGSS-2000 および JGSS-2001 によって得られたデータを中心にした経験科学的な方法を中心にした。ただし、JGSS は、今後も継続されるけれども、まだ 2000 年度と 2001 年度に実施された本調査が二回行なわれただけであるので、長期にわたる経年的なトレンドを知ることができないという限界がある。また、JGSS の成り立ちから言って当然に国際的な比較を視野に入れているものの、そこまでは蓄積が及んでいない。このため、本稿においては、JGSS-2000 と JGSS-2001 の集計数を合計することでサンプル数を大きくし、より信頼性のある分析ができるように試みた。そして、最近に実施された他の社会調査の結果も参照しながら、JGSS-2000/2001 による宗教意識研究から何が明らかになったのかを紹介してみることにした。

2. 現代日本人の宗教事情

2.1 現代日本人に見られる宗教性

毎年刊行されている『宗教年鑑』には、現代日本における最新の宗教統計が掲載されている。その平成 13 年版を見ると、わが国には 2000 年 12 月 31 日現在の数字で 22 万 6117 の宗教団体（宗教法人を含む）が存在し、それらの信者数を合計すると 2 億 1537 万人となる、とまとめられている（文化庁編、2002、31 頁）。これに対し、2000 年 10 月 1 日に実施された国勢調査の確定値として発表された日本の総人口は、1 億 2693 万人なのであるから（矢野恒太記念会編、2002、45 頁）、公表された統計上では日本人は一人が二つ近くの宗教の信者を兼ねてなっているということになるわけである。もとより、このような数字などは、各宗教団体が自分たちの基準で報告した信者数の合計に過ぎないもので、とても信ずるに足りないとも言えるであろう。しかし、実は、ここからだけでも現代日本人の宗教性の特徴の一端を考えることができるように思われる。

- ①神道系の信者数は 1 億 795 万人で、つまり日本人の 85% が知ってか知らないかのうちに神社の氏子になっているのであって、これには驚く人がいるかも知れない。それでも、読売新聞が 2001 年 12 月に行った「宗教観」についての世論調査によれば、70% が「正月に初もうでに行く」と答えており（読売新聞社世論調査部編、2002、377 頁）、実際 2003 年の初詣で客の予想は 310 万人の明治神宮を筆頭に全国のおもな箇所だけで 02 年より 236 万人多い 8725 万人もの参拝が見込まれているほどである（2002 年 12 月 19 日付新聞報道）。こうして見ると、神道の公称信者数というものが、大変な水増しだとは言にくいような気もしてくる。すなわち、日本とは、なお八百万の神が人々

の身近に宿っている神道国だとして良いのではないかと感じられる。

②仏教系の信者数は 9542 万人で、これも日本人の 75%に及んでいる。同じく読売新聞調査によって調べると、仏教思想にもとづく「盆や彼岸などにお墓参りをする」が 76% である（読売新聞社世論調査部編、前掲書、376 頁）。やはり、日本とは、仏教国としての性格も強く有していると言える。

③いわゆる新興宗教とか新宗教と言われる宗教団体などが分類されている諸教の信者数は、1021 万人で、国民の約 8%を占めているとされる。これらの宗教団体は、当然に独自の教義を強調しているけれども、その成り立ちや教えを神道か仏教のいずれかあるいは双方に求めたり、要素として取り入れているものが大部分である。

こうして見てくると、近代化の進んだ現在のわが国においても、たとえば読売新聞調査で「家に神棚や仏壇など神仏をまつ場所がある」という回答が 78%もあるように（読売新聞社世論調査部編、前掲書、377 頁）、神と仏が併存して融合しあっているという日本独特の宗教文化がいまだに色濃く残っているとしなければならないのである。

④キリスト教徒は、177 万人で 1%を超えているに過ぎず、明治時代の解禁以来の布教の歴史やミッションスクールによる教育活動、第二次世界大戦後にはアメリカ文化の圧倒的な影響があったにもかかわらず、キリスト教がわが国に定着しているとはとても言い難い。しかし、現代日本人にとって、教会での結婚式やクリスマスが人気を集めていることもあり、キリスト教がまったく関心を引いていないとの判断はできない。

さらに、文部省（現、文部科学省）の統計数理研究所が 1953 年から 5 年ごとに行なっている「国民性調査」のなかで、83 年から 98 年までの 4 回において調査項目になった『『宗教的な心』というものを大切だと思いますか』という問いに対して「大切」とした回答が 80%から 68%程度あったことは（統計数理研究所、1999、74 頁）、近代的な科学技術の発達した現在であっても“宗教的な心”が依然として高く評価されていることを表している。このように、現代日本においては、古代以来の雑種的な宗教とシンクレティズム（宗教の混合・重層信仰）によって「どんな宗教だってかまわない」という真剣さに欠けているという批判するべき面があるけれど、「海をこえて、南の島や西の大陸から渡ってきた宗教は、片はしから採り入れられて、われわれの先祖たちの精神的血肉になった」とされているように（久木幸男、1965、6 頁）、多様で豊かな宗教文化が営まれている。そして、宗教的な雰囲気に対する精神的な共感が日本人の生活のなかに見られるのは、各人がライフコースにおいて経験する通過儀礼や毎年繰り返される年中行事の多くのものが、それぞれ神道と仏教を中心としつつ、これにキリスト教も加わった宗教とのかかわりを強く持って歴史的・民俗的に行なわれてきているところからも理解できるのではないかとと思われる。

2.2 現代日本人の“信仰のない宗教”

それでは、現代日本人で何らかの宗教を信仰していると表明している者の割合は、どれ

くらいなのであろうか。JGSS-2000/2001 では、宗教関連項目として「あなたは、信仰している宗教がありますか」と問い、対象者に信仰する宗教の有無を尋ねている。その結果を見ると「ある」は9.7%に過ぎず（対象者数 5863）、われわれは漠然とした“宗教的な心”は大切だと思っただけではいるけれど、特定の宗教に対して信仰を表明するというコミットメントをあまり持っていないことが分かる。実際、自分の信条として不信心や無宗教、あるいは無神論者と称する人は多いのである。以上のような、相反する現代日本の宗教事情については、かねてより関心が寄せられてきたところであるが、その訳はどこにあるのであろうか。

- ①神道は、わが国独自の民族宗教であるが、その起源は原始的なアニミズムに由来する自然宗教であったから、もともと明確な教義があったわけではなく、古代以来の日本人は八百万の神を畏敬し、恐れたりすることが主であった。それに、神道（神社）に与っての重要な出来事は、近代になると明治政府の国民教化政策により「国家の祭祀執行の場、国民道徳の源泉とされ、国家神道として歩み始め…宗教と見なされず、宗教を超越するもの」となり、“神社は宗教にあらず”と言われて宗教としての要素をなくしていた時期があったことであろう（幸・扇田・關川、1990、163～168 頁）。現在は、神社神道も宗教法人の一つとなっているけれども、やはり宗教として信仰の対象とするには違和感が残ると言うのには、それなりの歴史的な理由があったように思われる。
- ②仏教は、キリスト教やイスラム教とならぶ世界宗教の一つであり、また開祖やその教えが継承されているという点で創始宗教としての性格を持っている。周知の通り、日本には古代に伝来してきて後、平安仏教・鎌倉仏教に代表される幾つもの宗派が誕生し、室町時代にも一向一揆など仏教に深く根差した社会的な運動が見られた。この仏教が変化していったのが、江戸時代である。すなわち、江戸幕府は、その前期に本末制度・寺壇制度を確立することによって仏教を統制下に置き、全国の世帯については構成員全体が特定の寺を旦那寺とする檀家となるように定めた。しかも、その世帯とは、夫婦一代限りのものではなく、「家族員の出生・死亡・婚姻などによる変動にかかわらず、各世代を貫く一種の自己同一性の観念を以て、過去から不斷に連続してきた直系の系譜体…ともいうべきものであって…日本独特のもの」とされる“家”としての性格を強く持っていた（竹田聴州、1996(1976)、250 頁）。そして、かかる“家”は、「日本社会の礎石であると同時に、日本宗教の礎石でもある」とも言うべきものであったから（エアハート、H.B.、1994(1984)、129 頁）、江戸時代の仏教は今日あるところの“家”を伝えてくれた祖先を崇拝するとともに子孫の繁栄を祈るという心情と結びついて“家の宗教”としての地位を獲得し、「日本的『家』意識と共同体を宗教生活の単位とする日本文化の基層のうえに定着」することになった（寺川幽芳、2000、134 頁）。こうして、日本人全員が許可された宗派の仏教徒であることが家を単位として義務づけられ、「江戸時代には、信仰の自由がなくなり…生まれた途端に、宗旨が決まる」よ

うに定められたのである（橋爪大三郎、2001、190～191 頁）。この結果、仏教の寺院や僧侶は、民衆の生活の管理を任され、経済的な保障を得たものの、その代わりに布教や宗教目的の集会など葬儀や法要以外の活動を抑えられて「形骸化し、教団としての仏教の衰退・無気力化」に陥ってしまうに至ったことを忘れてはならない（幸ほか、前掲書、208～210 頁）。すなわち、現在でも“葬式仏教”や“供養仏教”と言われて仏教が揶揄されている要因は、このあたりにあったのである。

以上のように、わが国の宗教史を概観すると、伝統仏教も神社神道も江戸幕府や明治政府の宗教政策によって事実上の国教として位置づけられたのであるが、そのために、かえって宗教としては形式化してしまい、日本人にとっては信仰の対象としにくい事情を作り出したのではないと思われる。

③先に見たように文化庁が諸教として分類しているものには、多数の新宗教の団体が属している。これらの諸教は、江戸時代の末期ごろから近現代にかけて神社神道や伝統仏教に対するものとして生まれ、神道や仏教に代わる信仰の受け皿としての役割を担ってきた部分があった。そして、このなかには、活発な活動や信者間の固い団結で知られるものも少なくない。ところが、現代日本人が持っている新宗教の団体へのイメージは悪く、「金もうけ主義、強引な勧誘、怖い・ぶきみ、教祖の強い個性」に回答が集中し、これらを信頼できるとするのは少数であった、と報告されている（石井研士、2002、244 頁）。JGSS-2000/2001 においても、いろいろな組織への信頼度を尋ねるなかで宗教団体を取り上げているが、ここでも「とても信頼」が2.3%、「少しは信頼」が10.6%と低く、「ほとんど信頼していない」が67.8%も挙げられていた。すなわち、“とても”では、国会議員をわずかに上回っているものの、“信頼していない”が掲げられた15の組織のなかで一番多くなってしまっているのである（図1）。

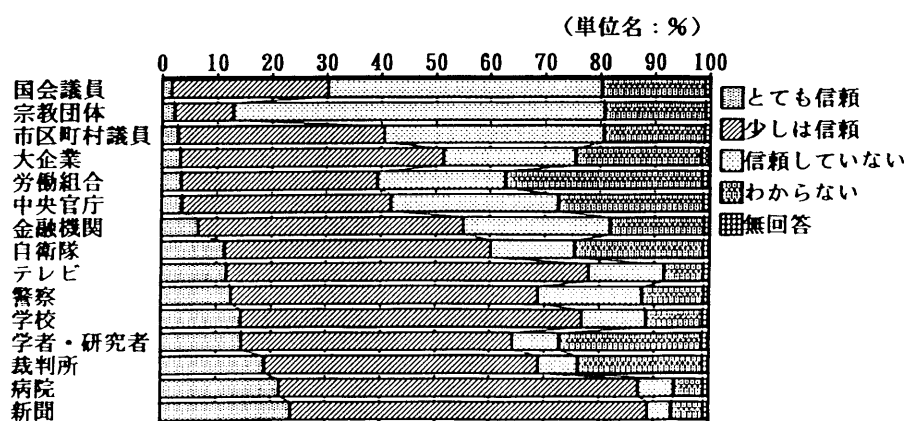


図1 JGSS-2000/2001における組織への信頼度

こうした調査結果の適用は、何も新宗教の団体だけの問題に限られることではない訳で、現代日本人のなかに制度化された宗教への強い不信感があることを示している。すなわち、現状では、とても宗教を信じる気になれないという心理を表しているように思われる。

④キリスト教の意義は、幕末・明治以降の日本に西洋文化を伝え、“家の宗教”に代表される伝統的な日本人の宗教意識に個人の救済という個人主義的な要素を加えたことであろう。近代日本人は、このキリスト教の個人主義に飛びつき、自己流に受容して伝統的な集団主義とこの新しい個人主義を共存させてきたとされているが(山折哲雄、1997、143 頁)、同時に「キリスト教は日本宗教の精髓ともいべき祖先崇拝の問題に、根本的に取り組むことを怠ってきた」と言われ、「キリスト教が日本伝道をさらに実りあるものにすることができかどうかは、実にこの祖先崇拝の問題をどうクリアするかに関わっている」と述べられていることにも注目するべきであろう(山折哲雄、1999、47 頁)。やはり、キリスト教は、近代以降の外来文化としての限界と彼らの理解不足があったために大きく信仰を獲得することができなかったのである。

つまり、日本の宗教には、われわれが信仰を表明することが低いという点について神道も仏教も新宗教もキリスト教にも、日本人の精神史からくるところの問題点がそれぞれに存在したのである。こうした状況から、現代日本人にとっての宗教を、初詣でや墓参りやお祭りやクリスマスなどだけが盛んに行なわれるような家族(家)や地域社会における「人間関係を中心とした儀式とか儀礼がまず存在し、重視される」ところの“信仰のない宗教”という一つのタイプの宗教だとして性格づける見解には(柳川啓一、1991、10～13 頁、引用は 69 頁)、妥当する面があるのではないかと考えられる。

3. 現代日本人の宗教意識における“家の宗教”

このように、われわれの宗教意識を個人の信仰という点から捉えるだけでは日本の宗教文化から考えて不十分だとしたら、ここで注目しなければならないのは現代日本人が「個人としては信じていないけれども家の宗教はこれこれです」という答え方をよくするという事実であろう(柳川、前掲書、67 頁)。

前に紹介したように、JGSS-2000/2001 で「信仰している宗教がある」とした回答は、9.7%と非常に低くかったけれども、他の社会調査においてはそれほどではない。たとえば、最近のものでは、「第2回世界価値観調査」(1995 年)において日本人のなかで「何らかの宗教を持っている」と回答した 37.8% (電通総研・余暇開発センター編、1999、147 頁)、「第10回国民性調査」(1998 年)で「何か宗教をもっている、信じている」として現れた 29% (統計数理研究所、前掲書、73 頁)、あるいはNHK放送文化研究所がISSP 国際調査の一環として日本で行なった宗教意識調査(1998 年)のなかで「信仰する宗教あり」と言う 35% (小野寺典子、1999、53 頁)、同じくNHK放送文化研究所による「第6回日本人の意識調査」(1998 年)のなかの「神を信じる」32%・「仏を信じる」39% (NHK放送文化研究所編、2000、131 頁)、前掲の読売新聞調査で「何か宗教を信じている」が 22% (読売新聞社世論調査部編、前掲書、376 頁)、といった結果が出ているからである。

このような差が認められるようになっている原因は何なのであろうか。その理由として

は、JGSS-2000/2001 では対象者の信仰している宗教の有無を尋ねた設問に続いて、わが国の宗教文化を参考にして「特に信仰していないが、家の宗教はある」という他の調査にはない第二の選択肢を用意したからではないかと考えられる。なぜなら、この「家の宗教はある」とする回答が24.9%あり、「信仰している宗教がある」と合わせると34.6%となって読売新聞調査を除いた他と近くなるからである。おそらく、他の調査の回答においては、信仰していると明確に認識していないのにもかかわらず、日常生活のなかで接触することの多い“家の宗教”が念頭にあったから、「宗教がある」とか「宗教を持っている」と思って答が出たのではないかと推察される。すなわち、JGSS-2000/2001 では、日本人の宗教への捉え方に見られる一つの興味深い特徴を知ることになったわけである。

さて、この“家の宗教”とは、「世代を超えた家と特定の宗教とが譜代的な関係において結合しているもの。典型的には伝統的仏教における寺檀関係にみることができる」（川崎恵璋、1994(1968)、424 頁）と定義されている。この寺檀関係は、前に紹介したように江戸時代にその起源を有しているが、「明治民法が法制化した直系家族制のもとで存続し、さらに第2次世界大戦後の夫婦家族制への転換期も、生活慣習として機能している直系家族制のイエ意識のもとで、伝道基盤としての機能を維持してきた」と述べられているから（寺川、前掲書、135 頁）、現代日本人であっても自らが主体的にある宗教を信仰の対象として選んだという契機よりも、“家の宗教”として先祖から伝えられてきた何らかの宗教（とくに仏教）が自分の家族生活のなかにすでにあったといったことの方が多くはないかと考えられる。このように、われわれの宗教意識のなかに“家の宗教”という伝統的な性格が残っているのだとしたら、それはどのような現れ方をするのであろうか。JGSS-2000/2001 の結果を利用して幾つかのカテゴリーを取り上げ、先行研究を参照しながら検討を試みてみたい。

3.1 性別

男女の別に分けて見ると、「信仰している宗教がある」では、男性が8.9%・女性が10.4%であって女性が少し高く、一般的に他の調査からも言われる“女性がリードする宗教性”を裏付けているようである。それでは、なぜこうなるのかについてであるが、“女性らしさ”に関しての精神分析学的な説明はともかくとして、ここでは家事全般にかかわることの多くが女性の役割となっており、そのなかで神棚や仏壇の掃除をし、水を換え供え物するようになるので、「こうした行為の延長線上に、神棚や仏壇を拝むなどの宗教行動が行なわれる」（石井研士、1997、91・92 頁）という解釈があることに注意をしたい。しかし、この説明では、こうした行動が信仰に結びついて行くというよりは、やはり“家の宗教”のための儀礼的な行動が反映しているからだとした方が適切なように思われる。

そこで、「家の宗教はある」を見ると、逆に男性27.5%・女性22.8%となって男女で4.5ポイントも差がついている。これには、明らかに「家はそれ自身固有の宗教的制度であっ

て、先祖が崇拜対象であり、男性の家長が崇拜の指導者であり、一単位としての家族は宗教制度の構成員として奉仕する」としてきた日本宗教の特徴が出ていると言えるであろう（エアハート、前掲書、130 頁）。この結果、「ない」は、62.4%対 65.4%で男性の方がやや少なくなっているのである。

3.2 年齢階層別

年齢は、宗教意識を知るうえで重要なファクターの一つである。図2は、男女別の年齢階層における結果を表示しているが、一見して年齢が高くなるほど「信仰している宗教がある」がやや増えていることが分かる。言うまでもなく、加齢による心身の衰えによる死への恐れから来世での救いを求める気持ちが宗教に向かわせるであろうことは考えられるのであって、ここから「宗教を信じる」ことは…年齢（加齢）によって大きく左右される。つまり、歳をとると宗教を信じるようになる」と言う国民性調査からの総括にもかなりの妥当性があるように感じられる（林知己夫、2001、168 頁）。

しかし、JGSS-2000/2001 によると、「家の宗教はある」も年齢とともに増加し、とくに男性の場合の増え方が大きく、70 歳代以上では女性より 10 ポイント程度も多くなっていることに眼が向く（図2）。すなわち、彼らは、第二次世界大戦の前か中に普通教育を受けて育った世代であるし、社会構造的にも“家の宗教”に触れやすい世代であった。そして、このうちの大部分が喪主などとして親の葬礼や法要を行なうことにより、“家の宗教”が存在することを自覚し、今日まで守ってきたとも言えるのである。

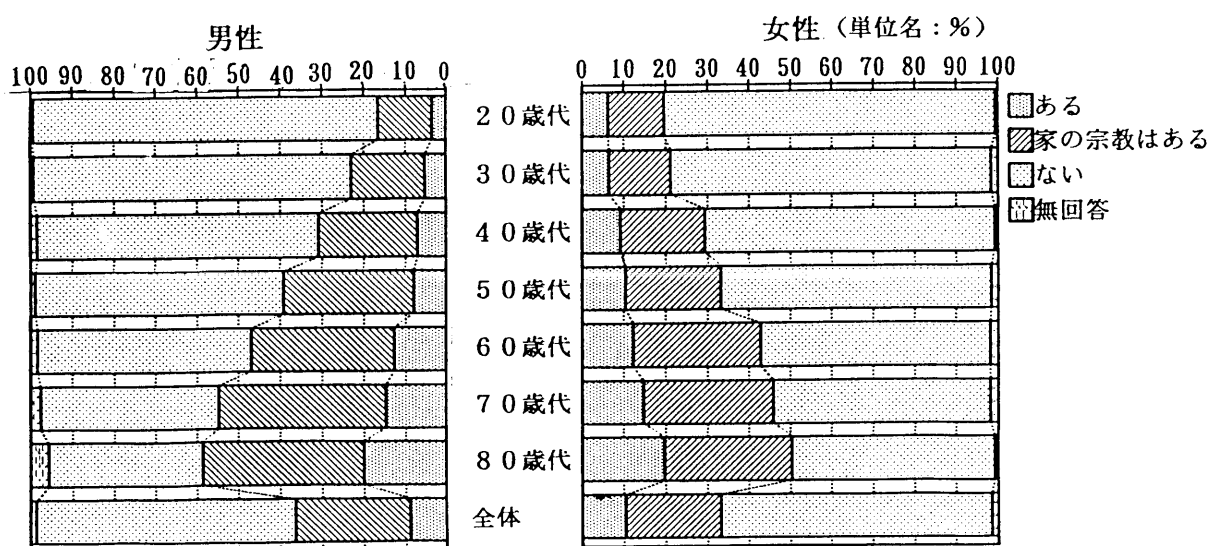


図2 JGSS-2000/2001における現代日本人の信仰の有無（性別・年齢別）

3.3 学歴別

現代日本人の宗教意識と学歴との関係では、当然に学歴が高いほど近代主義に則った学校教育を受ける期間が長かったため、信仰の有無については「肯定回答率が減少し…こう

した傾向は時代や調査の相違にかかわらず同じである」とされている(石井, 1997, 86 頁)。これを、JGSS-2000/2001 のデータで調べると、「信仰する宗教がある」は中学卒(男性 12.6%・女性 14.5%)、高校卒(男性 8.0%・女性 8.6%)、短大卒(男性 9.5%・女性 9.1%)、大学卒以上(男性 6.6%・女性 10.7%)となっており、男性についてはサンプル数の少ない短大卒を除けば一定の推移を明らかに読み取ることが可能である。

しかし、「家の宗教はある」で見ると、男性の方も中学卒から順に 29.3%・26.4%・26.6%・27.7%と傾向が崩れてしまい、女性の 25.0%・22.3%・21.5%・22.4%と同様にはつきりしなくなってしまう。つまり、「家の宗教」については、学歴というファクターはあまり効いていないのである。この理由は、「家の宗教」というものが個人の精神構造に何らかの課題を突きつけているのではなく、外面的な儀礼として守っていれば済むからではないかと思われる。

3.4 地域別・市郡別

第二次世界大戦後、とりわけ 1960 年代の高度経済成長以降になって現代日本社会に都市化という大きな社会変動がもたらされた状況が日本人の宗教に大きな影響を及ぼしてきたことには、疑問の起きる余地はない。この問題については、たとえば「都市が非宗教的であることは世論調査から裏づけられており、きわめて自明であるかのように見える…都市規模が大きくなるにつれて宗教意識は低下してゆく」と説明されれば(石井, 1997, 98 頁)、誰でも「その通りだ」と容易に受け入れることができるであろう。

JGSS-2000/2001 の結果では、どのようなことが分かるのであろうか。JGSS-2000/2001 では、全国を北海道・東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の 6 つの地域ブロックに分け、それぞれのなかで 13 大市(札幌市・仙台市・千葉市・東京都区部・川崎市・横浜市・名古屋市・京都市・大阪市・神戸市・広島市・北九州市・福岡市)、その他の市、町村という地方公共団体の人口規模別によって標本抽出を行なったが、この方法に従って信仰している宗教の有無を検討してみることにしよう(図 3)。

それによれば、北海道・東北で「ない」がやや高いのは、北海道が明治時代以降になって本格的に開拓された地域であるところから本州とは異なった宗教文化が見られることを示しているようである(柳川、前掲書、14~17 頁)。また、関東で「ない」が を超えて突出しているのは、やはり東京都を中心とする世俗性の強い巨大都市圏を含んでいるためであろう。そして、とくに「家の宗教はある」が 20%を切っている事実は、この地域で核家族化や単身世帯化が非常に進んでいるという構造変動を表しているものと思われる。これらに対して中部以西の西日本においては「家の宗教はある」が高く、とくに男性では中部 30.8%、近畿 33.1%、中国・四国 35.5%、九州 33.9%にまで達しており、どうも日本全国が「家の宗教」の存在に関しては社会構造の面で大きく二つに分けることが可能なような印象さえ残る。

しかし、もっと特徴が明瞭に出るはずなのは市郡別である。ここでは、まず「信仰している宗教がある」については、上で紹介した一般的な見解と異なっておりほとんど差がないことに注意をしたい。つまり、マス・コミュニケーションなどで大衆文化がすみずみにまで行き渡っている現代日本社会では、脱宗教化は都市規模ともはや関係ないところにきているのかもしれない。ところが、なぜか市郡別の違いが気になるのは、「家の宗教はある」と「ない」とが都市規模において対照的な結果が出ているからであろう。これは、性別のところで見たように“家の宗教”を持つことの多い男性においてより一層はっきりとしている。すなわち、「家の宗教はある」は、13 大市 21.3%、その他の市 26.7%、町村 33.6%なのに対して、「ない」は同じ順で 68.1%、64.3%、54.0%となっているからである。ここにも、日本の宗教文化が個人主義的と言うより、やはり家と村を中心とした集団主義と言われる社会的な基礎の上で成立していた名残りが現れていると感じられる。

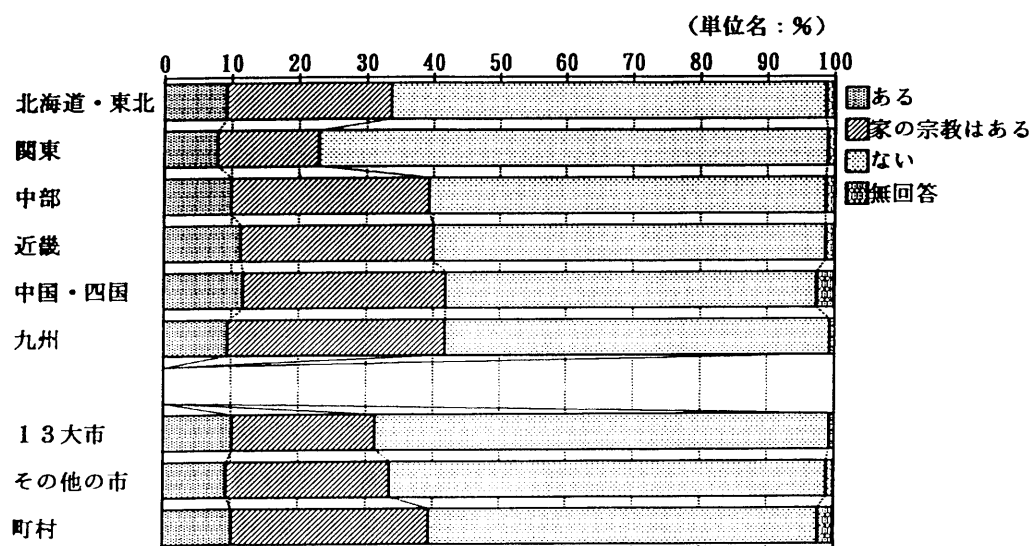


図3 JGSS-2000/2001における現代日本人の信仰の有無（地域別・市郡別）

3.5 信仰の度合い

JGSS-2000/2001では、宗教関連項目として「信仰している宗教がある」と「家の宗教はある」と回答した対象者に対して、その「信仰の度合い」を尋ねている。それによれば、「熱心である」7.4%、「まあまあ熱心である」24.9%、「そんなに熱心でない」62.9%となっている。つまり、たとえ「宗教がある」というなかであってさえ、“熱心さ”を表明している者は少数派なのであり、“信仰のない宗教”という日本人の淡泊な宗教性を物語っているように受け取ることができる。

ただ、この設問を男女別に見ると、女性の方が「熱心」8.8%・「まあまあ熱心」31.8%であり、男性よりも13.8ポイントも高く、信仰の度合いでは女性の宗教性の方が強く現れている。これは、女性には、男性よりも“家の宗教”に拘束される部分が少ないので、“現世利益的”と言われる女性の宗教意識や行動が率直に出てくるからかも知れない(石井、1997、

93 頁)。

3.6 宗教団体への加入

いかなる宗教や宗派にとっても、その教義の展開と教団（信者がつくる団体や会）の活動は大きな意義をもっていると思われる。

さて、JGSS-2000/2001 では、いろいろな組織を挙げ、これらに加入しているかどうかを聞いているが、このなかで「宗教の団体や会」へ入っている人の割合は 6.9%という少なさである。たしかに、前で見たとおり「信仰する宗教がある」と言う人が全体の 9.7%に過ぎないのであるから、それぞれの宗教の信者団体の一員となっている人がさらに少数なのは当然な結果である。ただし、「信仰している宗教がある」と答えた人では宗教団体への加入が 55.0%もいるのに対し、「家の宗教はある」は 4.4%、「ない」は 0.6%となっている事実から、「家の宗教はある」と言う人程度では個人としての行動には消極的で、「ない」の方にむしろ近いと見るべきであろう。

3.7 宗教名

JGSS-2000/2001 では、「信仰している宗教がある」と「家の宗教はある」という回答をした対象者に対して具体的な宗教名が何かを答えてもらっている。それでは、現代日本において「信仰している宗教がある」か「家の宗教はある」として挙げられている宗教名には、どのようなものがどれくらい存在するのであろうか（表 1）。

表 1 JGSS-2000/2001 において挙げられた宗教名

仏教	497 (25.2%)	創価学会	105 (5.3%)
真言宗	137 (7.0%)	立正佼成会	9 (0.5%)
天台宗	23 (1.2%)	霊友会	2 (0.1%)
浄土宗	101 (5.1%)	幸福の科学	2 (0.1%)
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿弥陀仏)	409 (20.8%)	崇教真光・真光	7 (0.4%)
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	178 (9.0%)	天理教	25 (1.3%)
日蓮宗	102 (5.2%)	真如苑	8 (0.4%)
時宗	2 (0.1%)	霊波之光	6 (0.3%)
法華宗	10 (0.5%)	仏所護念会	1 (0.1%)
神道	44 (2.2%)	百光	1 (0.1%)
稲荷大明神	3 (0.2%)	PL教団	2 (0.1%)
キリスト教	27 (1.4%)	生長の家	6 (0.3%)
カトリック	15 (0.8%)	金光教	5 (0.3%)
プロテスタント	7 (0.4%)	大山祇命神示教会	2 (0.2%)
日本ハリストス正教会	1 (0.1%)	御嶽教	1 (0.1%)
エホバの証人	3 (0.2%)	世界救世教	4 (0.2%)

これを見ると、仏教という回答が、単に「仏教」とだけしたものとは具体的な宗派名を挙げたものを合わせると 74.1%と圧倒的に多いという特徴が現れている。そして、神道が 2.4%あり、キリスト教はエホバの証人を含めて 2.9%にとどまり、さらに諸教に数えられているものが合計で 9.7%となっている（これら以外に「仏教プラス神道」としたり、「先祖供養」といった日本らしいものを含んだその他の表現、わからない、無回答が合わせて 224 例で該当数 1969）。

このように、21 世紀に入った現在のわが国であっても仏教（および仏教の諸宗派）が自分の信仰している宗教か、あるいは“家の宗教”として挙げられることが目立っていて、いまだに“家の宗教”とは、すなわち“家の仏教”であったという江戸幕府の宗教政策に起源を有する伝統的な性格が残っていると言えよう。また、具体的な宗派名では、浄土真宗が他を引き離しているが、これは「現在の浄土真宗教団の構成員が、『家の宗教』の意識をきわめて濃厚にもっている…まさしく現代の浄土真宗が『家の宗教』であることを示している」と言う記述に符合しているのではないと思われる（寺川、前掲書、144～145 頁）。そして、神道は、やはり宗教としてはあまり見なされていないことが分かる。こうして、日本では、いろいろな系統を持ったたくさんの宗教や宗派が信仰上の激しい争いをあまり演じることもなく併存していることも事実で、われわれが多神教のような文化的な環境のなかで生活をおくっているのもまさしく“日本的”なところなのである。

4. 配偶者の宗教をどう見ているか

4.1 配偶者における信仰の有無と信仰の度合い

このように、現代日本人の宗教意識においては、なおも“家の宗教”がかなり影響を及ぼしている事実が明らかになった。そこで、JGSS-2000/2001 では、調査時点で「配偶者がある」と言う対象者に対して同様の質問形式を用いて現在のパートナーである配偶者の宗教を尋ね、かつての“家”はもはやないにしても、この名残りが現代の家族生活にどの程度あるかを確認することを試みた。

その結果、配偶者の信仰の有無については、「信仰している宗教がある」9.5%、「家の宗教はある」24.3%、「ない」65.6%となっており（該当者数 4160）、自分に関することとの間には大きな相違は出ていない。また、同様に「信仰している宗教がある」および「家の宗教はある」という回答のあった配偶者の信仰の度合いについては、「熱心である」10.0%、「まあまあ熱心である」28.4%、「そんなに熱心でない」58.3%となっており、相手側の方に“熱心さ”が少しあると見ていることが分かる。これは、神棚や仏壇のお参りなどの日常の宗教的な行動について自分のしていることでは、そうは思っていないとも、配偶者がしているのを見れば“心が込もっている”のではないかと感じているのであろうか。と言っても、その差は小さく、要するに夫婦である以上、おたがいに同じような信仰の状態にあるものと見ているように思われる。

これを、確認するために、ここでは対象者本人の信仰している宗教の有無と配偶者の信仰の有無とのクロス表と対象者本人の信仰の度合いと配偶者の信仰の度合いについてのクロス表を掲げることにした（表2、表3）

表2 対象者本人の信仰している宗教の有無と配偶者の信仰している宗教の有無とのクロス表

(本人)		(配偶者)			合計
		信仰している宗教がある	家の宗教はある	ない	
(本人)	信仰している宗教がある	264 (人)	57	72	393
	家の宗教はある	75	835	181	1091
	ない	51	105	2438	2594

表3 対象者本人の信仰の度合いと配偶者の信仰の度合いとのクロス表

(本人)		(配偶者)			合計
		熱心である	まあまあ熱心である	そんなに熱心でない	
(本人)	熱心である	63 (人)	23	10	96
	まあまあ熱心である	43	200	89	332
	そんなに熱心でない	16	119	613	748

この表で、網掛のしてある交差しているところの百分率を対象者本人の側から挙げれば、信仰の有無では 67.1%・76.5%・94.0%、信仰の度合いでは 65.6%・60.2%・82.0%となつて高率の値が並んでいる。大体において、対象者は、夫婦がたがいにかなり一致した宗教状況のもとに家庭生活を営んでいると見ていえるわけである。

4.2 「配偶者の宗教」として挙げられた宗教名

さらに、「信仰する宗教がある」と「家の宗教はある」とした配偶者の持っているとする宗教名に関しては、以下の通りの回答が得られた（表4）。

表4 JGSS-2000/2001 において挙げられた配偶者の宗教名

仏教	393 (28.0%)	創価学会	75 (5.3%)
真言宗	84 (6.0%)	立正佼成会	4 (0.3%)
天台宗	14 (1.0%)	霊友会	4 (0.3%)
浄土宗	101 (5.1%)	幸福の科学	1 (0.1%)
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿彌陀仏)	267 (19.0%)	崇教真光・真光	4 (0.3%)
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	123 (8.8%)	天理教	21 (1.5%)
日蓮宗	71 (5.1%)	真如苑	8 (0.6%)
法華宗	6 (0.4%)	仏所護念会	1 (0.1%)
神道	27 (1.9%)	百光	1 (0.1%)

稲荷大明神	1 (0.1%)	PL教団	2 (0.1%)
キリスト教	27 (1.9%)	霊波之光	1 (0.1%)
カトリック	11 (0.8%)	生長の家	5 (0.4%)
プロテスタント	7 (0.5%)	金光教	6 (0.4%)
エホバの証人	3 (0.2%)	大山祇命神示教会	2 (0.2%)
		御嶽教	2 (0.1%)
		世界救世教	3 (0.3%)

以上をまとめると、仏教が仏教の諸宗派を合わせて 73.3% (前述のような理由から、浄土真宗が多いのも同様である)、神道 2.0%、キリスト教がエホバの証人を含んで 3.5%、諸教を合計して 9.7%となっている (これら以外に「仏教プラス神道」としたり、「先祖供養」などのその他の表現、わからない、無回答が合わせて 108 で、該当数 1403)。これを対象者本人の言う宗教名と比較すると、一二の出入りやキリスト教の比率が少し高くなるという違いがあるものの、仏教を圧倒的多数とするあたりにはおたがいの具体的な宗教名に関してはほとんど違いはないと見ているように判断できる。

次に、配偶者のいる対象者が挙げている自分の宗教名と配偶者のものという宗教名をクロスさせて両者が一致する度数と比率を調べることにしたい (表 5)。

表 5 対象者の宗教名が配偶者の宗教名と一致した度数(左が対象者、右が配偶者。括弧内は一致の割合)

仏教	337-321 (95.3%)	創価学会	59- 56 (94.9%)
真言宗	86- 72 (83.7%)	立正佼成会	4- 4 (100 %)
天台宗	15- 10 (66.7%)	霊友会	2- 2 (100 %)
浄土宗	64- 58 (90.6%)	幸福の科学	0- 0 (0%)
浄土真宗(本願寺・門徒宗・南無阿彌陀仏)	268-236 (88.1%)	崇教真光・真光	4- 4 (100 %)
禅宗(曹洞宗・臨済宗)	115-103 (89.6%)	天理教	13- 13 (100 %)
日蓮宗	63- 58 (92.1%)	真如苑	5- 5 (100 %)
時宗	2- 0 (0%)	霊波之光	1- 1 (100 %)
法華宗	6- 6 (100 %)	仏所護念会	1- 1 (100 %)
神道	21- 19 (90.5%)	百光	1- 1 (100 %)
稲荷大明神	1- 1 (100 %)	PL教団	1- 1 (100 %)
キリスト教	14- 11 (78.6%)	生長の家	3- 2 (66.7%)
カトリック	10- 8 (80.0%)	金光教	3- 3 (100 %)
プロテスタント	6- 4 (66.7%)	大山祇命神示教会	2- 2 (100 %)
日本ハリストス正教会	0- 0 (0%)	御嶽教	1- 1 (100 %)
エホバの証人	2- 2 (100 %)	世界救世教	3- 3 (100 %)

これを見ると、まず「仏教」と伝統仏教の各宗派を合計した場合では、一致度が非常に高く、90.4%にもなっていることに注目したい。そして、ケースの少ない宗教が多いので偏差が出ることが懸念された諸教系については、100%も目立っている。すなわち、本人が

認知している限りではあるけれど、彼らと配偶者との間の持っている宗教は、大体において一致しているというわけである。

このことは、アメリカでも起こっている事柄であって、自由に交際しているかに見えるアメリカの若者もいざ結婚となると同じ信仰の相手を選ぶことが多く、それは宗教が異なるといういろいろな宗教的な行動をめぐるカップルがもめるものになるからだ、とされている（幸ほか、前掲書、11 頁）。これは、アメリカで実施されている GSS の調査結果からもたしかめられていて、本人と配偶者との宗教関係は宗教やキリスト教の各教派についても同じという例が目立ち、「結婚相手を決める際にも、宗教がこれだけ多くの人々の行動を規制している」と述べられているほどである（大石編、前掲書、6～9 頁）。

しかし、日本では、アメリカよりも宗教意識が低いために結婚相手に希望する条件として「宗教はほとんど無視される」と言われているにもかかわらず（湯沢雍彦、1995、86 頁）、
「宗教がある」と言う夫婦に限られるにしても、表 5 のように高い一致が見られるのは何故なのであろうか。それには、夫婦のどちらかが結婚後に合わせたのか、あるいは同じ宗教団体における活動をしたことが交際のきっかけになって結婚したのか、などが解釈として思いつくであろう。アメリカでは、後者が大部分で「教会を通じての出会いの機会がそれほど多い」とされているが（大石編、前掲書、9 頁）、前に見た通り日本では宗教団体への加入率は非常に低いのであるから、こちらが多数だとは考えにくい。

この理由としては、やはり仏教を宗教として挙げている夫婦については、「家族内でも夫と妻が異なった宗旨の寺に属していることもあったが、ひとつの家がひとつの寺と固定した関係を結ぶ一家一檀那寺へと次第に変わっていった」との過程を経て（山折哲雄・川村邦光、2000、105 頁）、夫婦のどちらかが婚家先の“家の宗教”の方に宗旨変えをして合わせるようにさせられた江戸時代以来の制度がやはり機能しているのではないかと考えられる。つまり、「外国人からみた時に非常に奇異に感じられる…女性が異なった宗教の男性と結婚した場合、その相手の家の宗教に変わる、あるいは男性が養子のケースでは養子先の宗教に変わる」ということであって — 宗教と言うよりも宗派と言った方がより適切であろうけれども — （幸ほか、前掲書、10～11 頁）、前者の理由が大部分の家庭で現在でも行なわれているやり方として当てはまっているのである。

5. むすびー “家の宗教” の将来は？

現代日本社会は、第二次世界大戦後の半世紀を超える歴史を通じて “家郷喪失の時代” と言われるような大きな社会構造の変動を経験してきた。もし、「社会構造から文化のパターンを、したがって、宗教というものを演繹」すると言うのであれば（森岡清美、1970、145 頁）、伝統的な宗教を成り立たせてきた社会的な基礎はもうかなり掘り崩されてしまったと見るべきであろう。たしかに、日本人の宗教意識の経年的な調査結果によれば、「戦後多数派であった信仰を持つ人は、戦後 50 年の間に緩やかに低下していき、現在は少数派になっ

た」と言われており（図4）、これが高齢者層にも及んできている、とされている（石井、2002、214～219頁）。われわれが、宗教にかかわる儀礼や行事をあたかも習俗のようにして行なっている様子は一応は盛んであるにしても、現実としては宗教離れとか脱宗教化がはっきりと指摘されているのである。

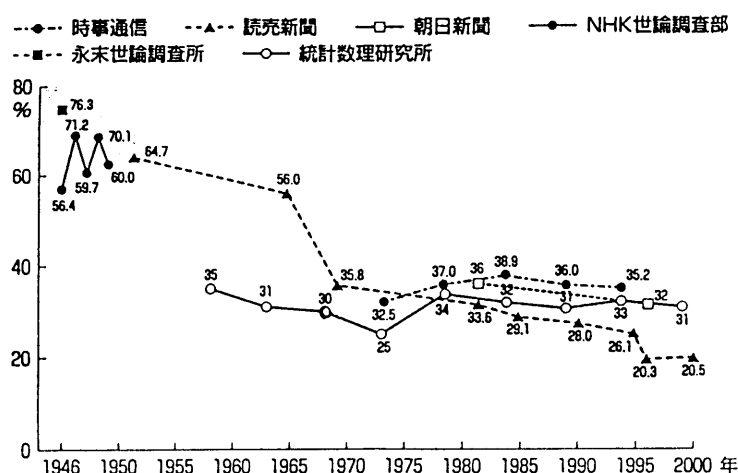


図4 戦後の宗教意識の変化

（「あなたは何か信仰していますか」という質問に「はい」と答え人の割合。出所：石井、2002、215頁）

ところが、JGSS-2000/2001においては、他の調査にはない「特に信仰していないが家の宗教はある」という選択肢を加えたことによって、現代日本人の宗教意識における幾つかのカテゴリーの分析については、単に調査対象者の信仰の有無の問題以上に、彼らの持っていると言うところの江戸時代の制度から由来する“家の宗教”がなお重要であるという事実が明らかになった。この説明については、一定の社会構造が存立すると、それに対応して宗教などの文化形態ができ、また宗教意識などに現れる価値観や価値体系ができあがるが、これらは保守的に機能するもので「もともと社会構造から出てきたのではあるけれど、自分が出てきた社会構造が変わってもなお変わらないで、自分の正当性を主張する…相対的な独立性を文化パターンが主張するゆえんがある」という見解が当たっているように思われる（森岡、前掲書、145頁）。とするならば、このJGSS-2000/2001の調査結果に見られた“家の宗教”の存在意義には、それなりの理論的な根拠があるのかも知れない。けれども、第二次世界大戦後の民法改正による家族制度の廃止後に進歩的あるいは保守的な立場からの論争が起こったことについて、「社会的現実の家が動揺していることを示すものであるが、家と不可分に結びついた祖先祭祀ないしそれと親縁関係をもつ宗教的契機についても同様である。動揺は旧態が変形する道程で生じているのか、それとも絶滅への前提として生じているのか、予断は困難である」（竹田、前掲書、432頁）とかつて論じられたところと比較すれば、今日の高齢者層の宗教意識低下が示唆するように、将来的には世代交替によって“家の宗教”も絶滅への道をたどって行くしかないものと想定される。

もちろん、一方で宗教界も、IT革命を敏感に察知してインターネットを積極的に利用

して、その活動から新しい信仰関係の形成が考えられる、という報告も出されている（深水顕真、2002、100～139 頁）。さらに、何よりも、このあわただしく不安な時代にこそ宗教による“癒し”が必要になってくるかも分からないのである。ここから現れるプロセスが、どのような結果を生み出すかは、JGSSをはじめとする宗教意識調査の長期的な趨勢の分析によって得られることになるものと考えられる。

[参考文献]

- 石井研士,1997,『データブック 現代日本人の宗教 ―戦後 50 年の宗教意識と宗教行動』新曜社。
石井研士,2002,『手にとるように宗教がわかる本』かんき出版。
H.B.エアハート,1984 (岡田重精・新田均訳,1994),『日本宗教の世界 ―一つの聖なる道』朱鷺書房。
NHK放送文化研究所編,2000,『現代日本人の意識構造』〔第五版〕日本放送出版教会。
大石紘一郎編,1997,『現代アメリカのこころと社会 ―国民意識からさぐる政治・社会の深層』朔北社
小野寺典子,1999,「日本人の宗教意識 ―ISSP 国際比較調査、日本の結果から」,『放送研究と調査』99 年 5 月。
川崎恵瑋,1968,「都市における家の宗教の変容」,川崎,1994,『村落・都市・宗教 ―実証的研究』法律文化社。
久木幸男,1965,『日本の宗教 ―民衆の宗教史』弘文堂。
竹田聴州,1976,「日本人の『家』と宗教」,竹田,1994,『日本人の「家」と宗教』竹田聴州著作集 6,国書刊行会。
寺川幽芳,2000,「浄土真宗と『家』」,龍谷大学社会学部創設 10 周年記念事業委員会編『社会・宗教・福祉―龍谷大学社会学部創設 10 周年記念論文集』法律文化社。
電通総研・余暇開発センター編,1999,『世界 23 カ国価値観データブック』同友館。
統計数理研究所,1999,「国民性の研究 第 10 次全国調査 ―1998 年全国調査」『統計数理研究所研究レポート』83。
橋爪大三郎,2001,『世界がわかる宗教社会学入門』筑摩書房。
林知己夫,2001,『日本人の国民性研究』南窓社。
深水顕真,2002,「インターネット時代の宗教」。
宗教社会学の会,2002,『新世紀の宗教 ―「聖なるもの」の現代的諸相』創元社。
文化庁編,2002,『宗教年鑑』〔平成 13 年版〕ぎょうせい。
森岡清美,1970,「家との関連での社会学的分析」,井門富二夫ほか,『日本人の宗教』世界の宗教 12,淡交社。
柳川啓一,1991,『現代日本人の宗教』法蔵館。
矢野恒太記念会編,2002,『日本国勢図絵』〔2002/2003 年版〕矢野恒太記念会。

山折哲雄,1997,『日本人の宗教感覚－歴史と現代に探る日本宗教の多元的な性質』日本放送出版協会.

山折哲雄,1999,『宗教の力－日本人の心はどこに行くのか』PHP研究所.

山折哲雄監修・川村邦光執筆,2000,『すぐわかる日本の宗教－縄文時代～現代まで』東京美術.

幸日出男・扇田幹夫・關岡一成,1990,『宗教の歴史－仏教・キリスト教・イスラム教・神道』創元社.

湯沢雍彦,1995,『図説 家族問題の現在』日本放送出版協会.

読売新聞社世論調査部編,2002,『日本の世論』弘文堂.